



令和7年度「全国学力・学習状況調査」の調査結果について

令和7年8月
江別市教育委員会

I 調査の概要

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらにそのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査の対象学年及び調査を実施した学校・児童生徒数

	対象学年	実施学校数(校)	児童生徒数(人)
小学校	第6学年	17	938
中学校	第3学年	8	878
合計		25	1,816

3 調査の内容

(1)教科に関する調査 (国語、算数・数学、理科)	出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。 ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等 ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等 調査問題では、上記①と②を一体的に問う。 ※中学校理科は、文部科学省 CBT システム (MEXCBT) によるオンライン方式 (CBT: Computer Based Testing) で実施。
(2)質問紙調査	・児童生徒に対する質問紙調査～学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査(例) 学習に対する興味・関心、授業内容の理解度、基本的生活習慣等、家庭学習の状況など ・学校に対する質問紙調査～指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査 (例) 授業の改善に関する取組、指導方法の工夫、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況 など

4 調査方式

悉皆調査(対象は小学校6年生、中学校3年生)

5 調査期日

- ◎小学校 国語・算数・理科 令和7年4月17日(木)
児童質問調査 令和7年4月18日(金)～4月25日(金)で学校指定日にオンライン方式で実施
- ◎中学校 国語・数学 令和7年4月17日(木)
理科・生徒質問調査 令和7年4月14日(月)～4月17日(木)で学校指定日にオンライン方式で実施

6 調査結果の解釈等に関する留意事項

本調査の結果については、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面であることなどを踏まえる必要がある。

Ⅱ 結果の概要

1 教科に関する結果の概要

○小学校6年生は、国語・算数・理科ともに全道・全国平均を上回っています。

○中学校3年生は、国語・理科は全道・全国平均を上回っています。数学は全国平均をやや下回りましたが、全道を上回っています。

2 質問紙調査に関する結果の概要

○「授業中の私語が少なく、落ち着いていると思う」割合は、小学校・中学校とも100%（中学校は5年連続100%）で、全国平均を大きく上回っており、江別市の小中学校は大変落ち着いた状態にあると言えます。

○「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」割合は、小学校、中学校ともに全国平均を上回りましたが、100%には未だ届いていません。各学校で行われているいじめをなくす取組はもののこと、道徳教育や人権教育の取組、自己有用感を醸成する取組等、根気強く継続して行うことで、割合を高めていく必要があります。

○「自分にはよいところがあると思う」割合は、小学校は全国平均と同等で、中学校は全国平均を下回りました。「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思う」割合は小学校では全国平均と同等ですが、中学校では全国平均を下回りました。各学校で行われている自己肯定感を育む取組をさらに充実させていく必要があります。

○「児童生徒が課題の解決のために自分で考え、自分で取り組んでいる」割合は全国平均と同等でした。また、「自分の考えをうまく伝えるよう、資料や文章、話の組み立てを工夫して発表している」割合は小学校では全国平均と同等でしたが、中学校は全国平均を下回りました。「他者と情報交換して話し合ったり異なる視点から考えたり協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫した」割合は小中学校とも100%でした。全ての小中学校で子どもが主役の授業づくりを推進しています。

○「ICT機器を活用した授業を週3回以上行った」割合は、学校質問紙では100%、児童生徒質問紙では小学校、中学校ともに全国平均を上回り、ICT機器を活用した授業が積極的に行われています。また、文章やプレゼンテーションを作成したり、情報を整理し資料を作成したりするなど、児童生徒がタブレット端末を多くの場面で活用し、スキルアップしている様子が見られます。

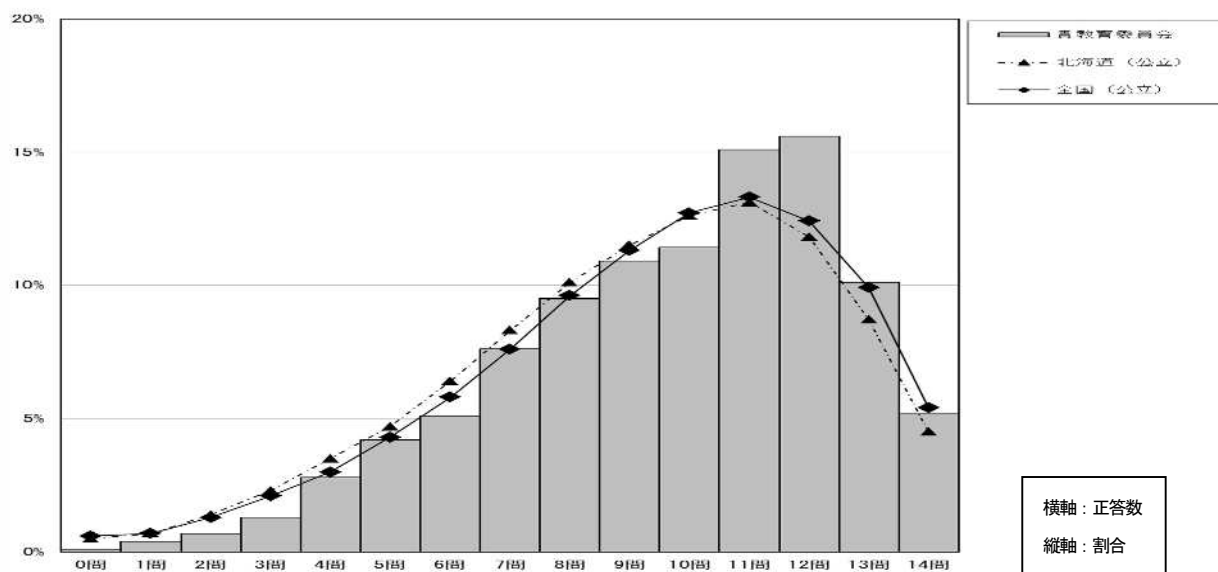
○「前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行った」割合は、小学校、中学校ともに100%で、全国平均を大きく上回り、小中一貫教育の柱の一つである「系統的な指導」の充実に向けた取組が進められています。

○「コミュニティ・スクール等の取組は『社会に開かれた教育課程』の実現に効果がある」割合、「学校と地域や保護者との相互理解が深まっている」割合は小中学校ともに100%で全国平均を上回っています。学校から見ると地域や保護者との理解が深まっていると言えますが、地域や保護者の意見を学校運営に反映するためにはコミュニティ・スクール等の取組のさらなる充実が必要です。

Ⅲ 各教科の結果

1 小学校 「国語」

＜正答数分布グラフ＞



	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)
江別市教育委員会	938	9.7 / 14	69.1
北海道 (公立)	34,203	9.2 / 14	65.4
全国 (公立)	936,137	9.4 / 14	66.8

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体			14	69.1	65.4	66.8
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	2	78.5	74.8	76.9
		(2) 情報の扱い方に関する事項	1	63.4	61.8	63.1
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	83.3	80.6	81.2
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	67.4	65.0	66.3
		B 書くこと	3	72.7	68.3	69.5
		C 読むこと	4	60.8	56.1	57.5
	評価の観点	知識・技能	4	75.9	73.0	74.5
思考・判断・表現		10	66.4	62.4	63.8	
主体的に学習に取り組む態度		0				
問題形式	選択式	9	65.8	63.3	64.7	
	短答式	3	80.9	76.8	78.5	
	記述式	2	66.2	58.1	58.8	

＜結果＞

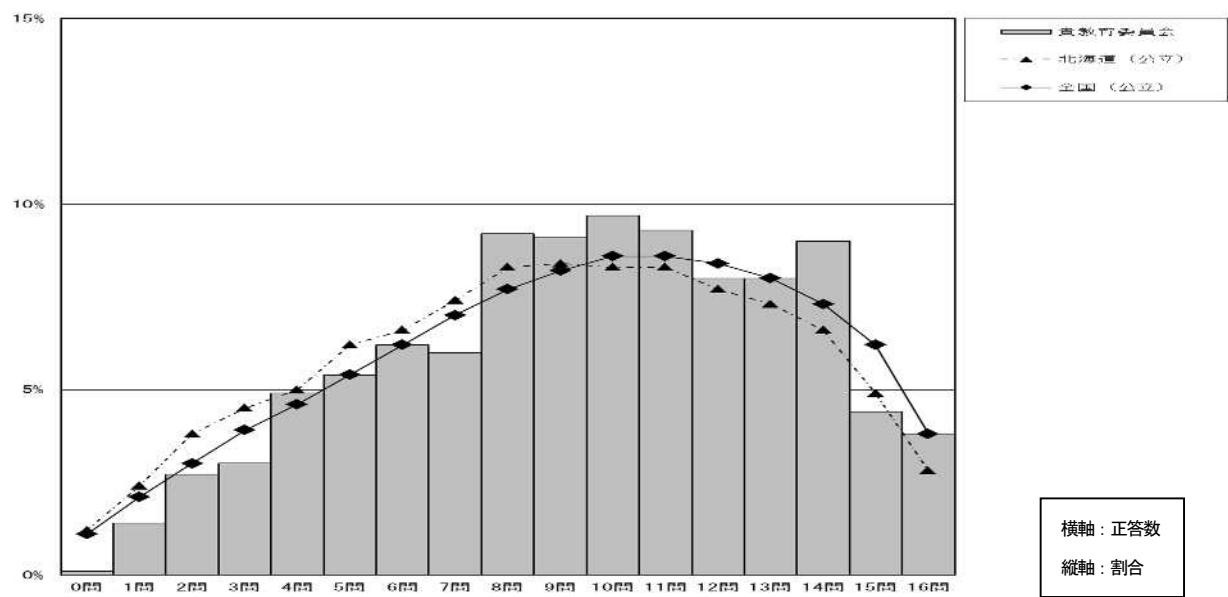
- 平均正答率は69.1%で、北海道を3.7ポイント、全国を2.3ポイント上回っています。
- 学習指導要領の内容別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、すべての項目で全道・全国平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けしたりして、伝え合う内容を検討することができる」

話すこと（対話）において、自分の目的や意図に応じて、相手から聞きたいことを引き出すためには、集めた材料を分類したり関連付けたりして、どのようにインタビューを進めたらよいかを考えることが大切です。

2 小学校 「算数」
＜正答数分布グラフ＞



	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)
江別市教育委員会	938	9.5 / 16	59.2
北海道 (公立)	34,203	8.8 / 16	55.2
全国 (公立)	936,399	9.3 / 16	58.0

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体		16	59.2	55.2	58.0
学習指導要領の領域	A 数と計算	8	63.1	58.6	62.3
	B 図形	4	57.1	53.9	56.2
	C 測定	2	54.9	50.7	54.8
	C 変化と関係	3	58.6	55.4	57.5
	D データの活用	5	65.5	60.9	62.6
評価の観点	知識・技能	9	67.2	62.6	65.5
	思考・判断・表現	7	48.9	45.5	48.3
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	6	69.6	66.4	67.2
	短答式	6	65.1	59.7	64.0
	記述式	4	34.9	31.4	34.9

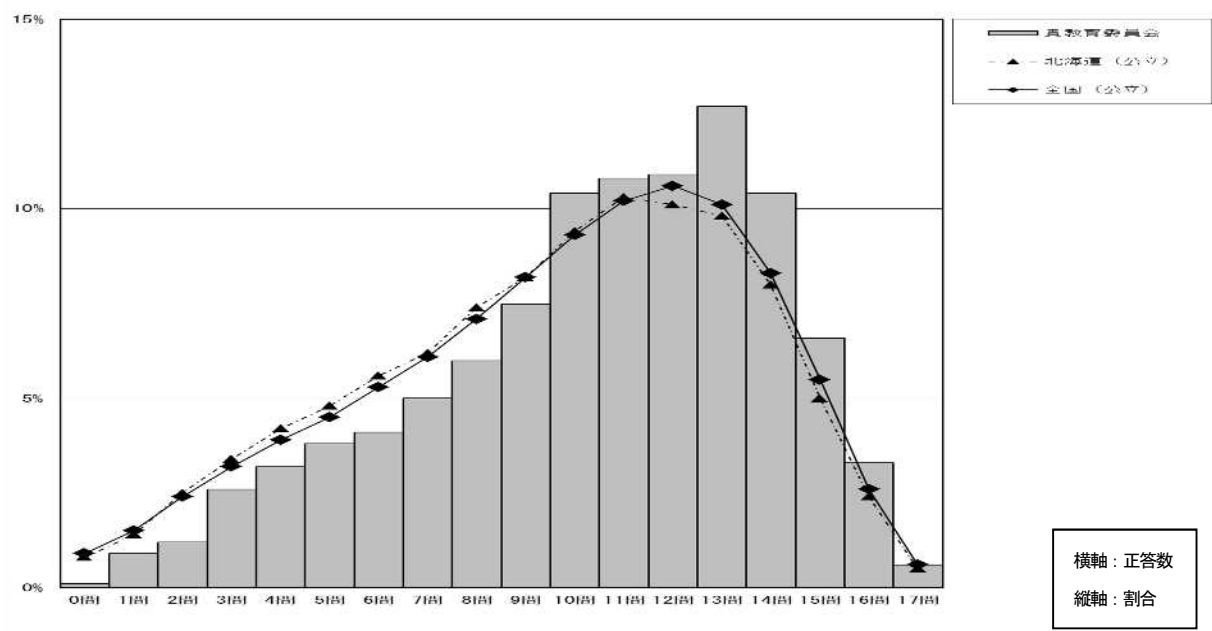
＜結 果＞

- 平均正答率は59.2%で、北海道を4.0ポイント、全国を1.2ポイント上回っています。
- 学習指導要領の領域別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、すべての項目で全道・全国平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「台形の意味や性質について理解している」
方眼上の四角形を台形ととらえるために、向かい合った一組の辺が平行であることに着目し、図形を区別できるようにすることが大切です。
- 「基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できる」
図形を構成する要素などに着目して、基本図形の面積の求め方を基に、図形の面積の求め方を説明できるようにすることが大切です。
- 「小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えることができる」
小数の加法について、数の表し方の仕組みや数を構成する単位に着目し、共通する単位を見いだすことで、整数の加法に帰着して考察できるようにすることが大切です。

3 小学校 「理科」
 <正答数分布グラフ>



	児童数	平均正答数	平均正答率 (%)
江別市教育委員会	938	10.4 / 17	61.5
北海道 (公立)	34,220	9.6 / 17	56.3
全国 (公立)	936,576	9.7 / 17	57.1

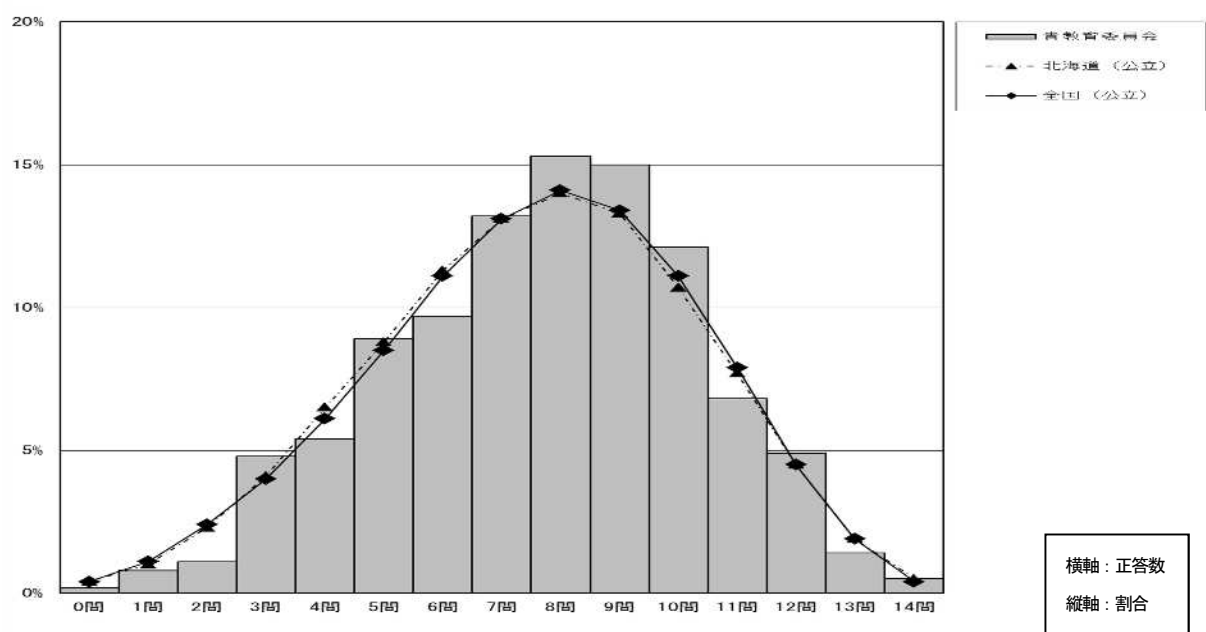
分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体			17	61.5	56.3	57.1
学習指導要領 の区分・領域	A 区分	「エネルギー」を柱とする領域	4	48.8	44.8	46.7
		「粒子」を柱とする領域	6	55.1	50.7	51.4
	B 区分	「生命」を柱とする領域	4	59.1	51.9	52.0
		「地球」を柱とする領域	6	70.6	65.9	66.7
評価の観点		知識・技能	8	58.2	54.2	55.3
		思考・判断・表現	9	64.4	58.2	58.7
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	11	56.9	53.8	54.7
		短答式	4	77.6	69.2	69.7
		記述式	2	54.1	44.3	45.2

- <結 果>
- 平均正答率は61.5%で、北海道を5.2ポイント、全国を4.4ポイント上回っています。
 - 学習指導要領の領域別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、すべての項目で全道・全国平均を上回っています。

<正答率の低い設問及び学習指導の改善点>

- 「乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いている」
 電流の働きについて、電流の大きさや向きと乾電池につないだ物の様子に着目して、それらと関係付けて調べる活動を通して、乾電池の数やつなぎ方を変えると、電流の大きさや向きが変わり、豆電球の明るさやモーターの回り方が変わることを身に付けることができるよう指導することが大切です。
- 「氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解している」
 雨水の行方と地面の様子について、流れ方やしみ込み方に着目して、それらと地面の傾きや土の粒の大きさを関係付けて調べる活動を通して、水は、高い場所から低い場所へと流れて集まることを理解するとともに、観察、実験などに関する技能を身に付けさせることが大切です。

4 中学校 「国語」
＜正答数分布グラフ＞



	生徒数	平均正答数	平均正答率 (%)
江別市教育委員会	878	7.7 / 14	55.0
北海道（公立）	33,467	7.6 / 14	54.0
全国（公立）	870,560	7.6 / 14	54.3

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率 (%)		
				貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体			14	55.0	54.0	54.3
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方にに関する事項	2	50.2	48.8	48.1
		(2) 情報の扱い方にに関する事項	0			
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	0			
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	4	54.2	53.8	53.2
		B 書くこと	5	52.4	51.4	52.8
		C 読むこと	3	63.7	62.0	62.3
評価の観点	知識・技能		2	50.2	48.8	48.1
	思考・判断・表現		12	55.8	54.8	55.3
	主体的に学習に取り組む態度		0			
問題形式	選択式		8	65.0	64.0	63.9
	短答式		2	75.1	72.9	73.6
	記述式		4	24.9	24.3	25.3

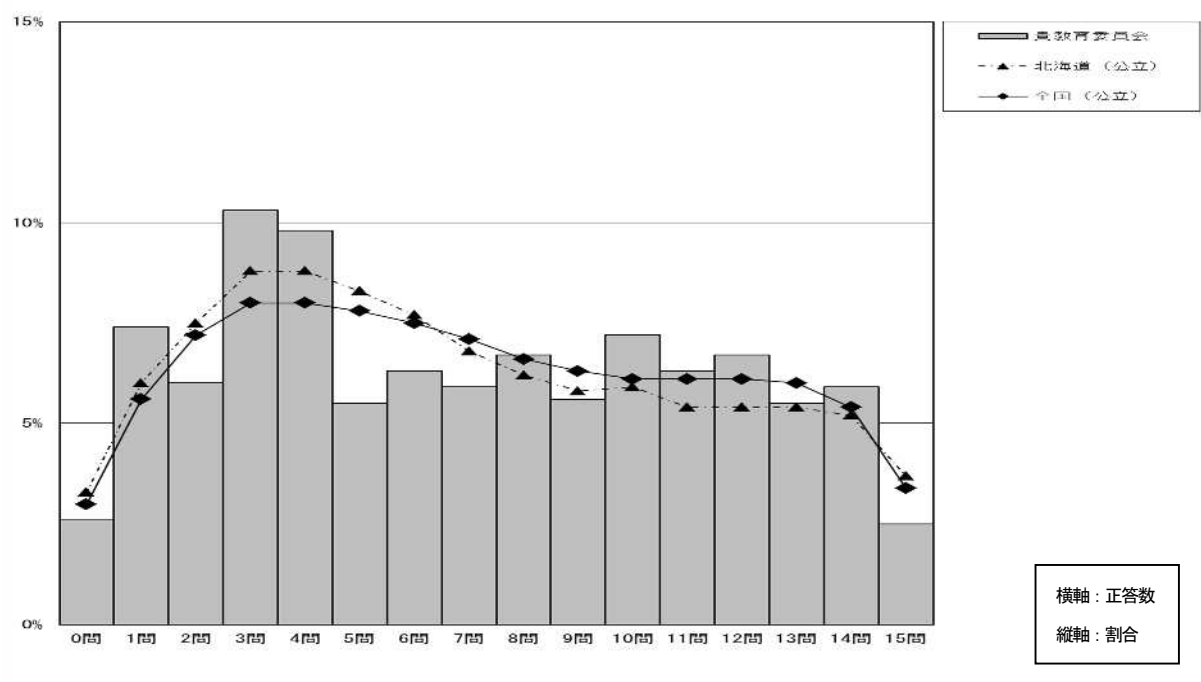
＜結果＞

- 平均正答率は55.0%で、北海道を1.0ポイント、全国を0.7ポイント上回っています。
- 学習指導要領の内容別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、「書くこと」以外の項目で全道・全国平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる」
目的や意図に応じて、日常生活の中から題材を決め、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることが大切です。
- 「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができる」
自分が伝えたい内容と、それに結びつく根拠を選び、伝えたい内容と根拠との関係が分かるように、接続する語句や指示する語句を用いて書くことが大切です。

5 中学校 「数学」
＜正答数分布グラフ＞



	生徒数	平均正答数	平均正答率 (%)
江別市教育委員会	880	7.1 / 15	47.4
北海道 (公立)	33,474	7.0 / 15	46.7
全国 (公立)	871,097	7.2 / 15	48.3

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体		15	47.4	46.7	48.3
学習指導要領の 領域	A 数と式	5	43.0	43.4	43.5
	B 図形	4	46.0	44.9	46.5
	C 関数	3	48.6	46.6	48.2
	D データの活用	3	55.6	54.8	58.6
評価の観点	知識・技能	9	53.1	53.6	54.4
	思考・判断・表現	6	38.9	36.4	39.1
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	3	51.7	56.1	54.0
	短答式	7	51.3	49.9	52.0
	記述式	5	39.5	36.7	39.6

＜結 果＞

- 平均正答率は47.4%で、北海道を0.7ポイント上回りましたが、全国を0.9ポイント下回っています。
- 学習指導要領の領域別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、「関数」のみ全道・全国平均を上回り、「図形」「データの活用」「思考・判断・表現」で全道を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「事象を数や式を用いて考察する場面において、①事象の特徴を的確に捉えること②素数の意味を理解していることができる」
事象を数や式を用いて考察する場面では、数や式の特徴を的確に捉えることが大切です。素数について理解することは、約数、倍数などの整数の性質を捉え直す際などに必要です。
- 「目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる」
文字を用いた式について、数学的活動を通して、具体的な場面で活用するような思考力、判断力、表現力等を身に付けることが大切です。

6 中学校 「理科」 (IRT による結果返却) ※公開問題の分析

※IRT とは、 国際的な学力調査 (PISA、TIMSS など) や英語資格・検定試験 (TOEIC・TOEFL など) で採用されているテスト理論です。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし (尺度) で比較できます。メリットとして以下の3点があげられています。

- ・調査日の複数設定が可能になる。各児童生徒が異なる問題を解く設計にできる。
- ・今まで以上に多くの問題を使用し、幅広い領域・内容等での調査が可能になる。
- ・学力の経年変化を各教育委員会・学校でも把握できる。

※問題構成について

- ・生徒1人あたり、公開問題10問と非公開問題16問を出題しています。
- ・公開問題には全日程に共通する問題と実施日別の問題があります。
- ・非公開問題は幅広い内容・難易度等から出題され、生徒ごとに異なる問題を解いています。

※IRT スコアとは、IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すものです。

※IRT バンドとは、IRT スコアを1～5の5段階に区切ったものです。3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなります。

※非公開問題は、国や自治体等の状況を把握することを主目的とする出題です。このため、個々の問題の内容や正誤はフィードバックされませんが、IRT スコア・IRT バンドの算出に使用されます。

○以下は公開問題の分析です。

【1】 平均正答数集計値

	生徒数	平均正答数
江別市教育委員会	879	3.1 / 6
北海道 (公立)	33,370	3.0 / 6
全国 (公立)	864,634	2.9 / 6

※全中学校が設問【1】を実施。設問【3】～【8】までを8校が2問ずつを割り当てられて実施。設問【2】と【9】は実施割り当てなし。

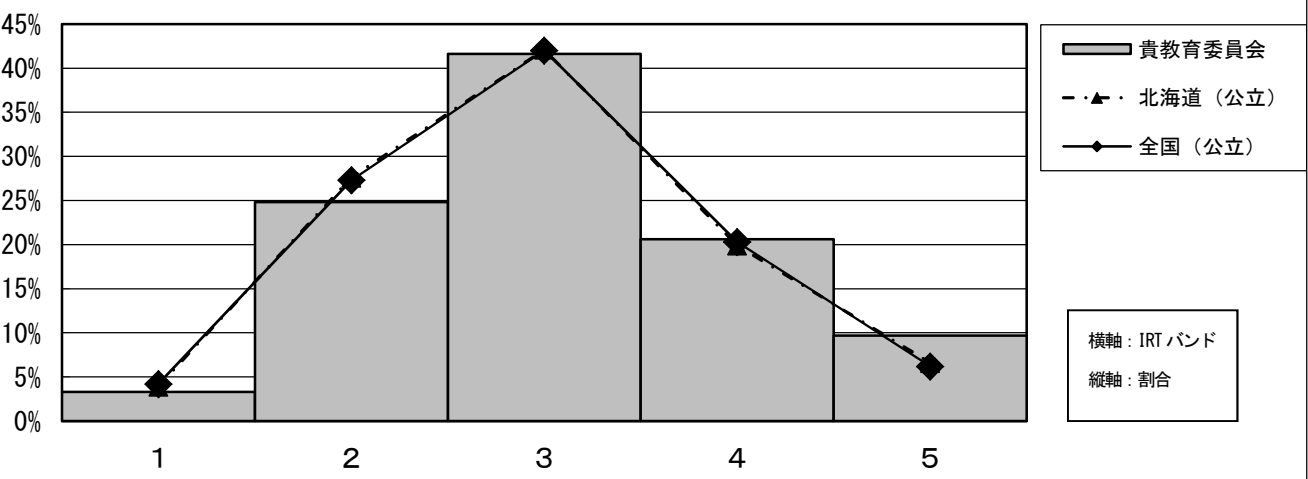
【2】～【9】 平均正答数集計値

	【2】、【9】	【5】、【8】	【3】、【6】	【4】、【7】
江別市教育委員会	/ 4	2.0 / 4	2.1 / 4	2.6 / 4
北海道 (公立)	2.0 / 4	1.9 / 4	2.2 / 4	2.3 / 4
全国 (公立)	2.0 / 4	1.9 / 4	2.3 / 4	2.3 / 4

IRT スコア 集計値

	平均 IRT スコア	パーセンタイル値				
		10%	25%	50%	75%	90%
江別市教育委員会	520	370	433	511	590	690
北海道 (公立)	505	364	423	493	573	655
全国 (公立)	503	361	422	495	572	652

<IRT バンド分布グラフ>



<結 果>

- 平均 IRT スコアは520 で、北海道を 15 ポイント、全国を 17 ポイント上回っています。
- 公開問題別集計結果からは、学習指導要領の領域の「エネルギー」及び「生命」で、評価の観点における「思考・判断・表現」において、全道・全国平均を下回り、それ以外は概ね上回っています。

<公開問題において正答率の低い設問及び学習指導の改善点>

- 「仮説を立てて科学的に探究する学習場面において、電気回路に関する知識及び技能を活用して、仮説が正しい場合の結果を予想することができる」
電圧の大きさが大きくなると、電流の大きさも大きくなり、電圧の大きさと電流の大きさは比例の関係にあることから、仮説が正しい場合の結果を適切に予想できることが大切です。
- 「スケッチから分かる植物の特徴を基に、植物の葉、茎、根のつくりに関する知識及び技能を活用して、植物の茎の横断面や根の構造について適切に表現できる」
植物の葉、茎、根のつくりについての観察を行い、それらのつくりと、光合成、呼吸、蒸散の働きに関する実験の結果とを関連付けて理解することが大切です。

IV 質問紙調査の結果

1 「児童・生徒質問紙」

(1) 生活習慣

① 朝食を「毎日食べている」、「どちらかといえば毎日食べている」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	92.7	92.5	-1.0	-1.2
中学校3年	91.0	90.8	-0.2	-0.4

② 「毎日同じくらいの時刻に寝ている」、「どちらかといえば同じくらいの時刻に寝ている」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	80.6	83.1	-1.3	0.2
中学校3年	80.4	78.9	-0.6	-1.8

朝食摂取については、小学校6年生、中学校3年生ともに昨年度と同様に全国平均とほぼ同じでした。

就寝時刻については、小学校6年生は全国と比べ1.3ポイント下回り、昨年度よりやや悪化しています。中学校3年生では改善が見られ、全国とほぼ同じ結果となりました。

子どもたちが夢や目標を実現し、将来自立して生きていくためには、規則正しい生活習慣を身に付けることが大切です。しかし、スマートフォンの保有率は全国的にも江別市の調査からも増加傾向にあります。子どもの生活リズムの向上のため、学校、家庭、地域等が連携してスマートフォンとの上手な付き合い方をはじめ、改善に向けた取組をさらに充実させる必要があります。

(2) 学習習慣

① 分からないことや知りたいことがあった時、自分で学び方を考え、「工夫している」、「どちらかといえば、している」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	81.0	83.6	-0.7	2.9
中学校3年	76.9	83.2	-0.6	4.6

② 平日に、学校の授業以外に1時間以上勉強する(学習塾、家庭教師、インターネットでの学習の時間も含む)

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	63.7	68.6	9.7	14.0
中学校3年	56.8	62.4	-4.8	-1.9

③ 休日に、1時間以上勉強する(学習塾、家庭教師、インターネットでの学習の時間も含む)

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	57.4	57.1	10.3	8.5
中学校3年	58.4	66.8	0.5	3.8

上記3項目について、③の小学校6年生「休日に1時間以上勉強する」以外のすべての項目で昨年度より下回っています。特に中学校3年生の「平日に、学校の授業以外に1時間以上勉強する」割合は全国平均を下回っています。

小学校6年生の家庭学習の時間は、昨年度と同等もしくはやや下回っていることに対し、中学校3年生は平日も休日も家庭学習の時間が下降傾向にあることは大きな課題と言えます。

小中一貫教育では、家庭学習の取組に着目している中学校区もあります。小中一貫教育の一貫した指導として、家庭学習にも目を向け、対策を講じるほか、今後も計画的に家庭学習が行われるよう保護者への呼びかけを工夫していく必要があります。

(3) 自己肯定感

① 自分には、よいところが「あると思う」、「どちらかといえばあると思う」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	86.6	84.4	-0.3	0.3
中学校3年	81.8	84.2	-4.4	0.9

② 先生はあなたの良いところを認めてくれていると思いますか

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	92.2	90.2	0.0	0.3
中学校3年	89.5	89.9	-2.7	-0.5

③ 将来の夢や目標を「もっている」、「どちらかといえば、もっている」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	81.0	83.8	-2.1	1.4
中学校3年	65.1	67.5	-2.4	1.2

「自分にはよいところがある」割合は、小学校6年生は全国平均とほぼ同じで、中学校3年生は、全国平均を下回りました。昨年度と比べると小学校6年生は増加し、中学校3年生では減少しました。

将来の夢を持っている割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに昨年度及び全国平均を下回りました。

市内の小・中学校では、一人一人のよさや可能性を見つけて伝えたり、集団における所属感や成就感を高めたりする取組を進めていますが、中学校3年生では「先生はあなたのよいところを認めてくれている」割合が全国平均を下回っています。

小中一貫教育の更なる充実と、活動や成果を蓄積して記録するキャリアパスポートの充実、日常的に子どもたちを認め励まし褒めるなど、自己肯定感の醸成に継続して取り組んでいくことにより、江別市の学校教育基本計画で掲げた目指す子ども像「夢を持ち、夢を語り、夢の実現に向けて行動する子ども」を実現していきます。

(4) 主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組

① 学級で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている 「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	86.7	89.4	1.8	3.1
中学校3年	82.8	89.1	-1.9	3.0

② 授業で課題の解決に向けて、自ら考え、自分から「取り組んでいる」、「どちらかといえば、取り組んでいる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	79.0	84.9	-1.3	3.0
中学校3年	78.2	81.5	0.5	1.2

③ 授業で自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを「工夫して発表している」、「どちらかといえば、工夫して発表している」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	69.2	64.9	0.6	-2.7
中学校3年	57.2	64.0	-5.8	-0.8

「話し合い活動の中で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」割合及び「課題解決に向け自ら考え、取り組んでいる」割合は昨年度より減少しており、「話の組み立てを工夫して発表している」割合は、中学校3年生が全国平均を大きく下回りました。

学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。特に対話的な学習については、自分の考えをまとめたり、相手の考えを理解したりすることにより、工夫した発表や深い学びに結びつきます。校内研究では多くの学校が対話活動に力を入れていますが、自分の考えを言葉にしたり、文章にしたりすることが苦手な傾向は続いていますので、今後も引き続き対話を取り入れた授業を構築し、自分の考えに理由や根拠に基づく話ができるように改善を図っていく必要があります。

(5) 社会に対する興味・関心

① 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	84.5	86.2	3.2	2.7
中学校3年	74.8	73.4	-0.5	-2.7

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」割合は、小学校6年生は昨年度に引き続き全国平均を上回り、中学校3年生は全国平均を下回ったものの、昨年度よりも増加しました。

今後も地域の行事に参加すること等を通して、自分の住んでいる地域に関心をもたせ、社会に開かれた教育課程の実現を図っていく必要があります。

(6) 思いやり

① 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	88.3	87.0	6.9	7.5
中学校3年	86.3	87.0	9.2	9.5

② 人が困っているとき進んで助けている。「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	92.5	93.6	-1.2	0.9
中学校3年	92.2	90.6	1.3	0.5

③ 人の役に立つ人間になりたい「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	96.5	97.3	0.1	1.4
中学校3年	95.7	94.8	-0.9	-0.4

「いじめは、どんな理由があってもいけないと思う」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均を大きく上回りました。「人が困っているとき進んで助ける」及び「人の役に立つ人間になりたい」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均とほぼ同じでした。

今後も各学校で実施されているいじめ根絶に向けたアンケートや児童生徒主体の集会活動等を継続し、いじめを許さない環境づくりをするとともに、早期発見・早期解決のため、いじめの積極的認知を進めていく必要があります。

いじめはいつでもどこでも起きることを念頭に、いじめ基本方針に則り、初期対応、組織的対応を迅速に行い、また、人への思いやりや規範意識を育むため、特別の教科道徳を中心に、学校の教育活動全体で道徳教育を推進していくことが大切です。今後も「いじめ見逃し0」とともに「いじめは、どんな理由があってもいけないと思う」割合100%を目指します。

(7) ICT機器の活用

① 学校の授業で、PCやタブレットなどのICT機器を「週3回以上使用した」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	76.5	64.4	4.8	4.9
中学校3年	93.9	73.8	17.4	9.4

② PC・タブレットなどのICT機器で文章を「作成する(文字、コメントを書くなど)ことができる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	83.8		2.0	
中学校3年	87.1		3.5	

③ インターネットを使って情報を「収集する(検索する、調べるなど)ことができる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	91.2		1.4	
中学校3年	90.9		-0.6	

④ PC・タブレットなどのICT機器を使って情報を「整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	68.9		-0.4	
中学校3年	65.3		2.0	

⑤ PC・タブレットなどのICT機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を「作成することができる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	84.4		7.7	
中学校3年	83.5		6.9	

「学校の授業でICT機器を週3回以上使用した」割合は、昨年度及び全国平均を上回り、特に中学校3年生は全国平均を大きく上回りました。今年度の質問は活用状況、特に発表物の作成に関する質問が加わり、全国的にICTを授業で「使用する」段階から、「活用する」段階に入っています。江別市では「プレゼンテーションを作成することができる」割合が、小学校・中学校とも全国を大きく上回っているなど、ICT機器の活用が進むことで児童生徒のスキルが上がってきています。

ICT機器の活用については今後も工夫はなされるべきですが、あくまでも手段であり、学習のねらいに迫るために単元指導計画の中で活用することや、有効と判断できるときに活用することが大事です。

2 「学校質問紙」

(1) 学習規律

① 調査対象学年について、授業中の私語が少なく、落ち着いていると「思う」「どちらかといえばそう思う」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	100.0	94.1	14.1	8.6
中学校3年	100.0	100.0	8.0	6.2

「授業中の私語が少なく、落ち着いている」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに100%で(中学校3年生は5年連続100%)全国平均を大きく上回り、江別市の小・中学校は非常に落ち着いた状態にあると言えます。

各学校においては、姿勢や態度、聞き方や話し方、授業開始のチャイムを守るなどの学習規律が丁寧に指導されています。また、どの中学校区においても、小中共通の学習や生活に関するスタンダードが確立されており、9年間の一貫した指導が行われています。

(2) 家庭学習

① 調査対象学年について、家庭学習の取組として、家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えた(教科共通)「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	3.4	3.9
中学校3年	100.0	100.0	7.2	8.1

家庭学習の取組として、「家庭での学習方法等を、具体例を挙げながら教えた」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに3年連続で100%となりました。

江別市の各小中学校では、学習内容を確実に定着させるために、家庭と連携を図りながら学習方法を具体的に指導し、家庭における学習の習慣化を図る取組が推進されています。

(3) キャリア教育

① 前年度までに、学校では、将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしましたしましたか

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	94.2		8.1	
中学校	100.0		1.6	

「将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をした」割合は、小学校では全国平均を大きく上回り、中学校では100%でした。それに対して「将来の夢や目標をもっている」児童生徒の割合は、全国平均を下回り、将来就きたい仕事や夢をもっていない児童生徒が少なからずいることが分かります。

江別市の各小中学校ではキャリアパスポートの取組や職場体験、進路指導を推進していますが、さらなる工夫が必要です。

(4) 主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組

① 前年度までに、授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れましたか

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	88.2	94.1	- 1.7	- 4.8
中学校	100.0	100.0	13.9	14.9

② 前年度までに、学習指導において、児童が、それぞれのよさを生かしながら、他者と情報交換して話し合ったり、異なる視点から考えたり、協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫しましたか

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	4.7	5.5
中学校3年	100.0	100.0	5.0	6.0

③ 前年度までに、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	13.1	14.3
中学校3年	100.0	100.0	19.7	21.4

児童生徒質問紙の「主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組」では、全ての項目で全国平均とほぼ同等の割合となっていました。指導面では小学校・中学校とも100%取り組んでおり、全国平均よりも上回っています。

江別市の多くの小中学校では校内研究を通して、対話を重視した授業づくりを全ての授業者が意識し、子どもが主役の授業づくりをすることで単元のねらいに迫れるよう授業改善を推進しています。

(5) ICT機器を活用した授業

① 学校全体で、教員が大型掲示装置等（プロジェクター、電子黒板等）のICT機器を活用した授業を「週3回以上」行った

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	100.0	100.0	5.8	7.1
中学校	100.0	100.0	7.5	8.1

② 調査対象学年について、児童生徒が、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業で「週3回以上」活用した。

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	3.4	6.8
中学校3年	100.0	87.5	5.5	9.2

「教員が大型掲示装置等のICT機器を活用した授業を週3回以上行った」割合は、小学校、中学校ともに全国平均を大きく上回っています。

江別市ではICT機器を活用した学習の推進を図るため、令和2年度から多機能型大型ディスプレイ（電子黒板）をはじめ、タブレット端末の全学年配置、ネット環境の改善等を進めてきました。

タブレット端末については、週3回以上授業で活用した割合は100%で全国平均を上回っていますが、児童生徒の回答とは数値の違いが見られます。

児童生徒の「週3回以上活用」の回答については、活用の程度や回数を各学校で確認する必要がありますが、各小中学校では、活用の回数を増やすことを重視するだけでなく、児童生徒の学習意欲を高め、分かりやすい授業が行われるよう、ICT機器を効果的に活用した授業を積極的に推進していくことに力を入れています。また、教師が活用するばかりでなく、児童生徒が学習を進める上でタブレット端末をツールとして駆使できるようにする指導にも力を入れています。

(6) 学校運営

① 児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルの確立を、「よく行った」「どちらかといえばよく行った」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	100.0	100.0	2.9	3.6
中学校	100.0	100.0	4.0	3.5

「教育課程を編成・実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルの確立を行っている」割合は、小学校、中学校ともに、3年連続100%となりました。

江別市の小中学校では、全国学力・学習状況調査や江別市学力調査（NRT）等の結果を分析し、児童生徒の実態に合った教育課程を編成しており、「計画(Plan)－実行(Do)－評価(Check)－改善(Action)」の一連のサイクルによって学校改善及び授業改善を図る取組を継続して行っています。

(7) 組織としての学校

① 前年度に、教員が授業で問題を抱えている場合、率先してそのことについて「週に1回またはそれ以上」「月に数回程度」話し合うことを行いましたか

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	94.1	94.1	15.0	15.2
中学校	62.5	75.0	-2.4	10.3

② 前年度に、教員が学級の問題を抱えている場合、「週に1回またはそれ以上」「月に数回程度」とともに問題解決に当たることを行いましたか

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校6年	94.2	94.1	5.7	6.6
中学校3年	87.5	87.5	9.5	10.2

教員が「授業」や「学級」で問題を抱えている場合、「週に1回またはそれ以上」「月に数回程度」とともに話し合ったり、問題解決に当たったりした割合は、「授業」では小学校、「学級」では小中学校ともに全国平均を大きく上回っています。

江別市ではいじめの問題をはじめとする生徒指導だけでなく、学年学級経営や授業づくりにもいわゆる個業ではなく組織であったるよう各小中学校に呼びかけています。問題を抱えていなかった学校もありましたが、いつでも教員が気軽に話ができる職場づくりをこれからも推進していきます。

(8) 全国学力・学習状況調査の活用

① 令和6年度の全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するための活用を「よく行った」「行った」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	100.0	100.0	3.5	3.2
中学校	100.0	100.0	6.0	5.9

「全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用した」割合は、小学校、中学校ともに4年連続100%となり全国平均を上回っています。

江別市の小中学校では、全国学力・学習状況調査結果を細かく分析し、次年度の教育課程に反映させるとともに、学校が一つのチームとして学力向上の取組を継続して行っています。

(9) 小学校教育と中学校教育の連携

① 前年度までに、近隣等の小学校・中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	100.0	100.0	34.7	36.0
中学校	100.0	100.0	28.3	31.0

「前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行った」割合は、小学校、中学校ともに昨年度に続き100%となり、全国平均を大きく上回っています。

江別市では、令和5年度から実施された小中一貫教育により、各中学校区での調査結果の交流を計画的に行っています。その中で、学力における共通課題等を明確にし、子どもたち一人一人の学力の向上に向けて「系統的な指導」を進めています。

(10) 家庭や地域との連携

① コミュニティスクール等の取組によって、学校と地域、保護者の相互関係が深まった「そう思う」「どちらかといえばそう思う」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	100.0	94.1	6.7	5.2
中学校	100.0	100.0	11.0	15.9

② コミュニティスクール等の取組は、「社会に開かれた教育課程」の実現に効果がありました「そう思う」「どちらかといえばそう思う」

	令和7年度結果(%)	令和6年度結果(%)	令和7年度全国比	令和6年度全国比
小学校	100.0		7.4	
中学校	100.0		13.0	

「コミュニティ・スクール等の取組によって、学校と地域、保護者の相互関係が深まった」割合は、小学校、中学校ともに100%となり（中学校は2年連続）、全国平均を大きく上回りました。

江別市の小中学校では、「特色のある学校づくり」として、地域の特性を踏まえて取組実践項目を掲げ、教育関係者、地域・保護者が協力し合い、教育活動の充実を図る取組を推進しています。また、江別市の全小中学校に、地域に住んでいる退職教員など、教員免許を持つ学習サポート教員を配置し、複数の教員が指導するティーム・ティーチングや長期休業中・放課後に補充的な学習を行い、基礎学力の定着に大きな役割を果たすとともに、教員の負担軽減にもつながっていると云えます。

参考引用文献

令和7年度 全国学力・学習状況調査 解説資料（国立教育政策研究所教育課程研究センター）